Number.11
2011/7

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

News Letter

演劇・映像の国際的教育研究拠点

■ 特集記事1
芸術文化環境研究コース：
フォーラム「大震災と芸術文化
現場からの証言」

■ 特集記事2
映像研究コース：
復元上映『レ・ミゼラブル』
――アンリ・フェスクール監督（1925年）――

■ 特集記事3
日本・西洋・東洋演劇研究コース：
国際研究集会「なぜ演劇か
――演劇の起源と現在――
(Colloque international « Pourquoi le théâtre ? ―― sources et situation actuelle du théâtre ――»)」

■ 活動報告
●東洋演劇研究コース P4
●舞踊研究コース P4
●芸術文化環境研究コース P5
●映像研究コース P5
●西洋演劇研究コース P6
●日本演劇研究コース P7
■ 新刊紹介 P6~8
■ イベントカレンダー P8
編集後記

特集記事 1 報告

芸術文化環境研究コース：
フォーラム「大震災と芸術文化　現場からの証言」

2011年6月14日（火）18:00~20:30　小野記念講堂

早稲田大学演劇博物館グローバルCOE芸術文化環境研究コースでは、3月11日の東日本大震災の被災地である岩手県、宮城県、福島県、茨城県にある文化施設・団体の担当者を招いて、フォーラム「大震災と芸術文化　現場からの証言」を、去る6月14日（火）に小野記念講堂で開催した。

フォーラムでは、まず冒頭に司会の伊藤同コース客員講師から16年前の阪神・淡路大震災後の被災状況調査を元に、震災の被害には直接的な人的・物的ならびに事業の中止・延期といったものだけでなく、震災後数ヶ月から数年にわたり及ぶ文化予算の縮減、スタッフの離散、需要（観客）の減少などの事業基盤の崩壊が指摘できること、しかし一方で芸術による支援・復興も各地で行われ、芸術文化の社会的な意義への覚醒も見られ、アートマネジメントの捉え直しにつながったことなどが述べられた。

フォーラム前半では、今回の震災による芸術文化環境の変化について、各パネリストから生々しい現場写真等も交えて報告があった。盛岡劇場の新沼祐子さんからは、全国公立文化施設協会加盟館を中心に東北3県の被害状況が報告されたが、それらは建造物や設備の損壊だけでなく、避難所や支援物資保管場所と変わることで事業予算は凍結、職員は配転、文化施設によっては指定管理解除されるというケースも起こったことなどが報告された。杜の都の演劇祭の

鈴木拓さんからは仙台を中心とする劇団活動への打撃や舞台技術者派遣会社の倒産やフリーランススタッフの離散などが、いわきアリオスの大石時雄さんからは最新の文化施設であるアリオスでも舞台周辺の複雑な機構などは震災には弱いこと（「建物と組織はシンプルな方が強い」という発言は印象的であった）、4月11日の余震以降は別館が市役所の一部となったこと、また市内の鑑賞団体（親子劇場や市民劇場）の会員が半減したことなどが、水戸芸術館の松本小四郎さんからは専門的な人材を有する文化施設がこうした事態に対応が難しく、活動の再開に苦労していることなどが報告された。

後半では、復興に向けての芸術文化ができることについて、まず鈴木さんから演劇人を中心に結成された「アートリバイバルコネクション東北（ARC>T）」の活動（調査・出前・制作・招聘・仕事）や、仙台フィルの復興支援コンサートについての報告があった。これを受け、新沼さんからはこうした芸術による支援への被災者

の反応は非常に好感度が高いこと、しかし慰問という第1ステップは終わり今は活力再生に向けての取り組みが必要なことが、大石さんからはこれを機会に今までの東京の芸術を消費する地方の文化環境を変えていく必要性が、松本さんからは今こそ芸術の意味を訴えていく必要性が提起された。

その後来場者からの質疑も交え、今後の岩手、宮城、福島、茨城の文化施設関係者の連携のあり方や、神戸との経験交流などについて討議しあって閉会した。被災地の一日も早い復旧・復興を祈るとともに、今回のフォーラムで語られたことが、これからの日本の芸術文化環境の改革に少しでも寄与出来ればと願いたい。

（GCOE客員講師　伊藤裕夫）

特集記事 ❷ 映像研究コース：

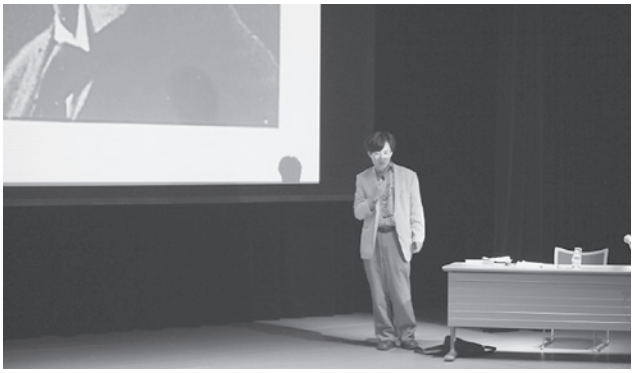
復元上映『レ・ミゼラブル』
――アンリ・フェスクール監督（1925年）――

2011年6月16日（木）10:00～17:45　小野記念講堂

映像研究コースでは、1925年の大作フランス映画「レ・ミゼラブル」を17.5ミリプリントよりデジタル復元し、その披露上映会を開催した。「レ・ミゼラブル」は、1905年以来、世界で何度も映画化されているが、このアンリ・フェスクール監督版は、最もよくヴィクトル・ユーゴー原作の雰囲気を伝え、映画作品としても芸術的に成功した作品である。

1984年にパリのシネマテーク・フランセーズが復元を完成させたオリジナルの35ミリ・プリントは、全4部構成で、上映時間も6時間におよぶ。これは、1925年にフランスで一般公開された完全な形での復元プリントである。また、本作は17.5ミリ映写機に使用されるフィルムとしても販売された。今回GCOEでデジタル復元を行ったのは、当時オランダで発売されたこの17.5ミリプリントである。「レ・ミゼラブル」の製作会社パテ・フレールは、この映画の17.5ミリ版を販売するにあたり、オリジナル・フィルム全体を再編集し、全3部構成の新たな版として販売した。その際、教育上の観点から、ファンティーヌが娼婦に身を落とす場面やジャベールの自殺場面は削除された。

シネマテーク・フランセーズが復元した「レ・ミゼラブル」は、オリジナル・ネガから復元した非常に美しい画質を持つプリントだが、ネガからの復元のため、一般に公開されたポジ・プリントにあった染色・調色が欠落している。17.5ミリプリントはおよそ5時間弱に短縮された再編集版ではあるが、公開時の色を保存している。この点をとっても、また我が国では1920年代以降一度も上映されていない傑作映画という点からも、GCOEによる今回のデジタル復元の試みとその上映は、大きな意味を持った。



上映の合間には、二名の研究生による研究報告が行われた。谷口紀枝氏による「『レ・ミゼラブル』日本映画への移植」では、日本において最後に本原作の翻案映画が製作された1950年までを研究対象に、「レ・ミゼラブル」の日本映画への移植過程が明らかにされた。特にその草創期に注目し、新聞小説から演劇、そして映画への受容の経路が検証された。小川佐和子は「アルベール・カペラニ監督版 Les Misérables（1913）の映画史的意義」を報告した。映画史上初めて原作を忠実に翻案したカペラニ版は、当時としては異例の長編映画であり、各国の映画界、とりわけドイツの作家映画に大きな反響を与えたことを論じた。

上映終了後には、事業推進担当者の小松弘教授による講演「映画『レ・ミゼラブル』とアンリ・フェスクール」が開かれ、出演者の契約書類や撮影前の宣伝記事、再上映された際のプログラムなど貴重な資料が多数提示された。本講演により、前衛映画作家のみが注目されがちな1920年代において、商業映画を撮りながらも前衛映画理論の中心人物の一人でもあったアンリ・フェスクールへの再評価が高まった。

オランダ語字幕の通訳は、本研究コース助手の山本律氏が担当した。上映に際して、世界の第一線で活躍する無声映画伴奏者、柳下美恵氏によるピアノ伴奏がなされ、上映会は盛況に終わった。長時間におよぶ大作映画に素晴らしい伴奏を披露して下さった柳下氏、また、ご来場下さった参加者の方々に改めて御礼申し上げる。

（GCOE研究生　小川佐和子）

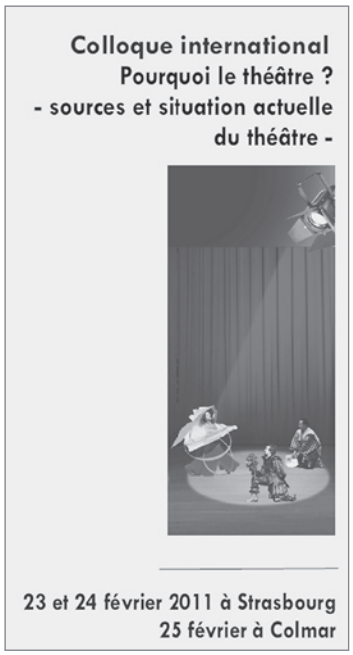
特集記事 ③ 日本・西洋・東洋演劇研究コース：

国際研究集会
「なぜ演劇か――演劇の起源と現在――
（Colloque international « Pourquoi le théâtre ? ―― sources et situation actuelle du théâtre ―― »）」

1日目：2011年2月23日（水） 9:00 ～ 17:10 ストラスブール大学
2日目：2011年2月24日（木） 9:00 ～ 17:40 ストラスブール大学
3日目：2011年2月25日（金）10:00 ～ 18:10 コルマール旧税関舎

早稲田大学演劇博物館とフランスのストラスブール大学及びアルザス・欧州日本学研究所（CEEJA）は、過去6年間にわたり、2年おきにそれぞれが研究集会を開催して、両国の最新の研究成果を紹介し合ってきた。通算第三回に当たる2010年度は、三者の共催による国際研究集会を、フランスのストラスブールとコルマールで開催し、当拠点からは、事業推進担当者と助手の合計5名が、当地に赴いて研究発表を行った。各人の発表題目は次の通りである。竹本幹夫（事業推進担当者・拠点リーダー）「結崎座（ゆうざきざ）と観世座（かんぜざ）」（以上、23日）、原田真澄（研究助手）「人形浄瑠璃文楽の太閤記物流行と『木下蔭狭間合戦』」（以上、24日）、李宛儒（研究助手）「植民地統治初期にみる台湾の「近代化」と商業演劇の出現　―日本と台湾の商業劇場の概観から―」、児玉竜一（事業推進担当者）「なぜ「なぜ演劇か」――日本演劇の語り物性をめぐって」、藤井慎太郎（事業推進担当者）「演劇の亡霊、不在と不可視の演戯」（以上、25日）。また、本拠点の研究協力者である車文明山西師範大学教授（同大学戯曲文物研究所長）も招聘され、研究発表「中国現存早期戏剧舞台（中国に現存する古代の演劇舞台について）」を行った。本会の詳細については、今年度末に刊行される『演劇映像学　2010』報告集および後述するCEEJAが出版する予定の論文集を参照されたい。

この国際研究集会では、当拠点とストラスブール大学以外にも、フランス各地の大学や、ドイツ、スペインなどヨーロッパ各国から講師が招かれて研究発表を行った。会期は3日間、発表者の総数は21名に及ぶ大規模な国際研究集会であった。発表内容は、古代ギリシアの演劇論から日本の現代演劇まで、多岐にわたる。当拠点からの参加者の専門は、前述の通り、図らずも日本演劇通史の観をなしている。それぞれの発表の後には活発な質疑応答がなされ、時には「演劇とは何か」という本質的な問題にも議論が及んだ。また、日本人による日本演劇の研究発表だけではなく、フランスの研究者による世阿弥の能楽論の発表や、ドイツの研究者による黒川能や、日本の60年代演劇に関する発表も行われた。日本演劇研究の国際的な広がりを象徴するような研究集会になったといえよう。



今回の国際研究集会の講演内容は、論文集（仏・英語）に纏められ、CEEJAから刊行される予定である。アルベール・カーン博物館の協力を得て発行された「還ってきた文楽フィルム　『日本の人形劇―人形浄瑠璃』　研究報告」、そしてパリで行われた2009年のGCOE拠点全体企画の国際シンポジウム「演劇・舞踊・芸術環境　日仏交流の20 世紀」を特集したフランスの演劇専門雑誌『Théâtre/Public』2010年2月特集号に続く、本拠点から海外へ発信する重要な成果が生まれることになる。

最後に、気の遠くなるほど煩雑な事務作業をこなしつつ、暖かな笑顔で我々を迎えてくれたストラスブール大学のジルー・栄・村上教授と、CEEJAのスタッフに心から御礼申し上げたい。

（研究助手　原田真澄）

東洋演劇研究コース：

活動報告

2011年2月から6月にかけて東洋演劇研究コースで開催された研究関連の行事は以下の通りである。今年3月に発生した大震災の影響により、新年度の研究活動のスタートを若干遅らせざるをえなかったが、5月に第一回の共同ゼミを開催、6月に海外からゲスト講師を招聘して特別講義を催した。

■特別講義『中国における女性演劇の可能性』

日時：2011年2月25日（金）16：00～18：00
会場：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
講師：銭珏（中国・上海戯劇学院講師、脚本家）
言語：中国語（通訳なし）

女性脚本家として中国で活躍しているゲスト講師を招き、中国の演劇創作における「女性」の現状と背景についてお話し頂いた。中国の「女性演劇」の可能性を問うことと、その位置付け、および将来の方向性なども提示された。

■2011年度第一回共同ゼミ

日時：2011年5月28日（土）15：00～17：00
会場：早稲田キャンパス国際会議場共同研究室7
発表者：ボウ・シルヴィ（パリ第十大学博士課程・GCOE研究生）
題目：関索戯の角度から張芸謀の映画『千里走単騎』を見る（*"Riding Alone for Thousands of Miles". Watching Zhang Yimou's Movie From the Guan Suo Opera's Perspective.*）
言語：中国語（通訳なし）

東洋演劇研究コースでは、共同ゼミにおいて研究生の博士論文の進度報告及び研究指導を行っている。2011年度第一回の共同ゼミでは、人類文化学を専攻する研究生により中国雲南省陽宗鎮小屯村で古くから行われてきた「関索戯」とそれを題材にした張芸謀の映画『千里走単騎』について研究発表が行われた。研究者に「儺戯」の一種と見なされている「関索戯」について二年程にフィールドワークの調査を行った発表者は、今回映画分析の手法を援用した発表を行った。事業推進担当者及び研究協力者からは、「演劇と映画」、「ドキュメンタリーとフィクション」、「儀式的な世界と現実」等のような多層的な対比の可能性が提示され、今後の研究の発展が期待されたゼミとなった。

■特別講義『清末から民国初年までの上海京劇』

日時：2011年6月11日（土）15：00～17：30
会場：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
講師：林幸慧（台湾・成功大学准教授）
言語：中国語（通訳なし）

上海を拠点として創刊され、清末と民国時代に中国で最も重要な日刊新聞紙の一つであった『申報』には様々な戯曲（伝統演劇）広告と厖大な上演情報が掲載されていた。ゲスト講師は長年にわたってこれらの上演情報と戯曲広告を考察し、清末から民国初年までの上海の戯曲上演の生態と「海派京劇」の形成過程を明らかにしてきた。今回の講演では、その長年の調査の成果に基づき、伝統的なテキスト分析では扱い切れなかった上演史的な側面を提示すると同時に、研究資料としての新聞紙広告の特徴、価値、および欠陥についても明白に指摘された。そのため、学術的な成果の交流だけではなく、研究生にとって研究方法に関するよい学習の機会となった。

（研究助手　李宛儒）

舞踊研究コース：

活動報告

舞踊研究コースでは21世紀COEから9年間にわたってコースリーダーとしてコースを引っ張ってこられた片岡康子先生が定年のため退官されることに伴い、コースリーダーを退かれることとなった。今後は鈴木晶新コースリーダーがこれまでの成果を引き継ぎながら最後の1年の指揮をとることになる。

■舞踊研究コース研究会

舞踊研究コース研究会では、博士論文執筆を目指すGCOE研究生の研究指導が行われた。GCOE研究生が2010年度の成果報告を行い、今後の研究の進め方に関して指導を受けた。今後は各研究生が、指導をうけて研究をすすめ博士論文として完成させることが求められる。

日時：2011年3月8日（火）13:00～17:00
場所：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
研究指導：片岡康子（早稲田大学客員教授）、石井達朗（GCOE客員講師・慶應大学名誉教授）、鈴木晶（法政大学教授）

■コンテンポラリー・ダンス・プロジェクト

中島那奈子氏をお迎えして、「ダンスは誰のもの？ ーダンスする身体の多様化をめぐってー」という題でご講演いただいた。中島氏はこれまで舞台芸術舞踊においてはあまり顧みられることのなかった老いた身体、障碍者の身体に焦点をあてながら「美学的な転回（エステティックターン）」と「技巧的転回（テクニカルターン）」という二つの転回を軸に、前者についてはビル・T・ジョーンズ、後者に関しては劇団ティクバ＋巡回プロジェクト、ピナ・バウシュ、ハイク・ヘニグ、大野一雄の例を挙げ、適宜映像資料を交えながら解説した。「美学的な転回」とはポストモダンダンス以降に美の基準が様々な言説によって批判され美そのものが自明視されなくなった事態を指し、「技巧的転回」は「美学的な転回」によって可能になった批判によって、新たなダンスの技巧が可能となり、障碍者や老いた身体といった新しい身体

とダンスが登場し受け入れられるようになった事態を指す。この二つの転回から、老いた身体や障碍者の身体の舞台芸術舞踊への登場と発展を歴史的に位置づけ、その意義を歴史的・美学的に考察する刺激的な講演となった。

日時：2011年3月8日（火）18:00～20:30
場所：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
講師：中島那奈子（ベルリン自由大学）
コメンテーター：石井達朗
タイトル：ダンスは誰のもの？ ーダンスする身体の多様化をめぐってー

（研究助手　渡沼玲史）

芸術文化環境研究コース：

活動報告

東日本大震災を受けてのスタートとなった2011年度ではあるが、今年度も芸術文化環境研究コースでは以下のように多様な研究会を開催している。とりわけ、6月14日に開催された「大震災と芸術文化」は、今芸術の現場に携わっている、また芸術について考えたいと思っている全ての観衆に開かれた貴重な研究会となった。

■舞台芸術と人材育成　「歌舞伎と伝統芸能の場合」（日本演劇研究コースとの共催）

日時：第5回　2011年4月19日（火）18：30～20：30
講師：中村京蔵（歌舞伎俳優）
聞き手：児玉竜一（早稲田大学教授・日本演劇研究コース事業推進担当者）
場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

昨年度から引き続きの開催となる「舞台芸術と人材育成」の第5回目の研究会。今回は、歌舞伎俳優の中村京蔵氏を講師に迎えた。中村京蔵氏は、自身国立劇場歌舞伎俳優養成所のご出身であり、現在同養成所にて教鞭をとられているなど、歌舞伎界における人材育成に最も精通なさっている講師のお一人である。聞き手の児玉教授の軽妙なリードもあり、和やかな研究会となった。

■フランスにおける芸術家養成の諸課題＜才能を証明することをめぐって＞

日時：2011年5月16日（月）　18：00～21：00
講師：エマニュエル・ヴァロン（パリ・ウェスト・ナンテール大学教授）
通訳：福崎裕子
場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

フランスから文化政策、演劇学を専門とするエマニュエル・ヴァロン氏を迎えて研究会を開催した。前半部では歴史的な背景に基づいてフランスでの芸術に関わる教育制度を、後半部ではコンセルヴァトワールを中心に現代のフランスにおける舞台芸術の教育制度についてご紹介頂いた。

■連続ゼミナール　〈所有〉からアートと社会の関係性を考える

日時：第1回　2011年5月23日（月）19：00～21：00
　　第2回　2011年6月 6 日（月）19：00～21：00
　　第3回　2011年6月27日（月）19：00～21：00
講師：曽田修司（跡見学園女子大学教授）
場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

今年度も、跡見学園女子大学の曽田教授を迎えて当ゼミナール開催の運びとなった。新年度を迎え、昨年度からの受講者にアーティストから他コースのグローバルCOEの研究生に渡る幅広い新規の参加者を加え、オリエーンテーションからスタートした。本年度は10回の開催を予定し、＜所有＞の観点から、アートについて個々人の関心に即した形で研究関心を深めてもらうことを狙いとしている。

■大震災と芸術文化　現場からの証言

日時：2011年6月14日（火）　18：00～20：30
パネリスト：新沼祐子（盛岡劇場）
　　鈴木拓（杜の都の演劇祭）
　　大石時雄（いわきアリオス）
　　松本小四郎（水戸芸術館）
モデレーター：伊藤裕夫（グローバルCOE客員講師）
場所：早稲田キャンパス27号館地下小野記念講堂

被災地となった岩手から茨城までの各県から芸術文化、とりわけ舞台芸術の世界で責任ある立場を担うパネリストを招いて開催した。前半には写真を交え現地の被災状況を、後半にはこれから舞台芸術に携わる者として何ができるのかを率直にお話し頂いた。詳細は、＜特集①＞をご覧ください。

（研究助手　光岡寿郎）

映像研究コース：

活動報告

■「韓国プロジェクト活動報告」

映像研究コース韓国プロジェクトは、韓国の無声映画時代における映画の受容を研究テーマに、事業推進担当者の小松弘教授と研究助手の山本律の二人で今年度より活動を開始したプロジェクトである。

韓国映画史研究、特に無声映画史については、研究にあたり多くの困難が存在する。

まず、韓国映画史の起点をいつに置くかという点から再検証する必要がある。韓国において初めて映画上映が行われた日については諸説あるが、そのうち新聞に載った映画の上映広告が現存する1903年6月下旬説が多く踏襲されている。しかし、世界で初めて映画が上映された日が、1895年12月28日にパリのグラン・カフェにおいてリュミエール兄弟の発明したシネマトグラフの一般有料公開であること、日本や中国では19世紀末に映画がもたらされていることを考慮すると、韓国でも19世紀末に映画がもたらされた可能性は高いのではなかろうか。この点で興味深いのは、韓国において最初に映画が上映されたのは、19世紀末に当時韓国に暮らしていた日本人に向けてであるという説である。

韓国プロジェクトは、今年度の5月1日より5日まで、韓国ソウル市にて研究出張を行った。今回の出張では、主にインタビューと高麗大学図書館・延世大学図書館、韓国映像資料院での資料調査を行った。

高麗大学図書館と延世大学図書館には、日本で閲覧困難な19世紀末から20世紀初頭にかけて韓国で発行されていた韓国語新聞・日本語新聞が数多く所蔵されている。1910年代に発行された新聞を比較して最初に気付くのは、日本語新聞と韓国語新聞では、映画の上映広告に載っている映画の上映場所が、全く異なるということである。日本人は日本人コミュニティで映画を受容し、韓国人は韓国人コミュニティで映画を受容していたことを窺わせる。しかしながら、日本における映画上映スタイルが、韓国における映画上映のスタイルに影響を及ぼしていたことを窺わせる上映広告もみうけられる。例えば、韓国語新聞に載った映画の上映広告に、当時の人気弁士が写真付きで紹介（1919年5月10日付『毎日申報』）されていることなどである。言うまでもなく、日本における無声映画期には、数多くの弁士が活躍していた。

なお、当時の韓国における弁士の語り口調がどういったものであるかについては、韓国映像資料院において実際に聞くことができる。展示室の一角に映画上映室が設けられており、常時古い時代の映画と弁士による解説音が流されている。また韓国映像資料院では、1919年発行の韓国語による最初の映画雑誌『緑星』をデジタル化したものを、タッチパネル式で閲覧することができる。本出張において我々は、延世大学図書館において実物を閲覧することができた。

インタビューは、世界的に著名な映画史研究家である韓国国立芸術大学のキム・ソヨン教授（5月2日19時～21時、聞き手：小松弘教授、通訳：山本律）と、韓国の無声映画研究で博士号を取得した韓国中央大学大学院博士課程生のイ・スンジン氏（5月3日14時～16時、聞き手：小松弘教授、通訳：山本律）の二人に行った。本出張での成果は、7月16日に開催する研究報告会での公開を予定している。

最後になるが、本出張にあたりインタビューのアレンジなどでご協力くださったソウル市在住のシン・ソジョン氏（GCOE研究生）に改めてお礼申し上げたい。

（研究助手　山本律）

西洋演劇研究コース：

活動報告

■ベケット・ゼミ（岡室美奈子）

ベケット・ゼミでは4月23日、5月28日、6月26日と定期的に、研究生による発表と2011年度にグローバルCOEから刊行予定のベケット論集についての打ち合わせの機会を持った。

■身体表象論プログラム（坂内太）

身体表象論プログラムでは3月30日、5月11日と、モダニズムにおける身体表象を巡る読書会を開催した。

■ポストコロニアル演劇研究会（澤田敬司）

日時：2011年6月11日（土）15:00～18:00
場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室
題目：John Romeril作『ミス・タナカ』リーディング上演
上演：演劇企画集団・楽天団

ポストコロニアル演劇研究会では、その主たる活動のひとつとしてオーストラリア演劇の紹介を行なってきた。今回、『ミス・タナカ』リーディング上演によって、日本では代表作である『フローティング・ワールド』以外には未だ積極的に紹介されているとは言いがたいジョン・ロメリル（John Romeril）作品の魅力を広く紹介することが出来た。今日のオーストラリア舞台芸術を語る上で最も重要な作家のひとりであるロメリルの作品を、演劇企画集団・楽天団の全面協力の下披露することがかない、非常に貴重な機会となった。

■フランス語圏舞台芸術研究（藤井慎太郎）

毎週月曜日、三限の時間帯にフランス語ゼミを開催している（戸山キャンパス33-2号館2階第2会議室）。今年度前期はJoseph Danan, *Qu'est-ce que la dramaturgie ?*, Actes Sud - Papiers, 2010（ジョゼフ・ダナン『ドラマトゥルギーとは何か』）を読み、翻訳を試みている。また、下記のレクチャーを開催した。

日時：6月13日（月）18:00～21:00
場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室
題目：「ドキュメンタリー演劇　その起源から現在まで」
講師：ダヴィッド・レスコ（パリ・ウェスト・ナンテール大学准教授）

すでに10本を超える戯曲の作家であり、俳優・演出家・音楽家でもあるレスコ氏に、ドキュメンタリー演劇についてお話し頂いた。その起源とされる1920年代のピスカートアの仕事、60年代のペーター・ヴァイスの理論、さらにはイギリスやイタリアにおける実践の例が紹介され、現代演劇の諸相を再検討する有意義な場となった。

■オペラ／音楽劇の総合的研究（丸本隆）

オペラ研究会では、月に1～2回の研究会を中心に活動を行っている。今年度は、5月14日に第一回目の研究会（下記）を開催した。

日時：2011年5月14日（土）15:00～19:00
場所：早稲田キャンパス8号館305室
題目：「ハンガリー王立歌劇場と「ナショナル・オペラ」について」
The Royal Hungarian Opera House and "National Opera" at the Turn of the Century
発表者：岡本佳子（GCOE研究生、東京大学大学院博士課程）

本発表では、主にハンガリーにおけるオペラ史の概観と19世紀末に開場した王立歌劇場（現ハンガリー国立歌劇場）のレパートリー分析が報告され、音楽家の具体例とともに、ハンガリーにおいて「ナショナル・オペラ」が国籍、言語の問題と密接にかかわりながら複雑な様相を見せていることが明らかにされた。発表は英語、補足説明や議論は日本語を交えて行われた。また、研究発表の他に、オペラ・音楽劇研究の今後を考える場が設けられ、活発な議論が行われた。

■17世紀フランス演劇研究会（オディール・デュスッド）

17世紀フランス演劇に関する月1回の研究会を中心に活動を行っている。また5月21日には、17世紀を題材とした作品も創作している作家エレーヌ・シクスーに関する下記の講演会を開催した。

日時：5月21日（土）15:00～17:00
場所：早稲田キャンパス国際会議場共同研究室7
題目：「エレーヌ・シクスーによる演劇のためのエクリチュールの試み ― 太陽劇団との協働作業の現場から」
講師：稲村真実（立教大学等非常勤講師）

1998年6月にスリジー・ラ・サルで行われたシクスーに関するシンポジウムから、主としてシクスーとアリアーヌ・ムヌーシュキンの対談がとりあげられ、80年代から始まる太陽劇団との協働作業をとおして発見された、テクストと演劇（戯曲）のエクリチュールの位相の違いが登場人物、時間性などから考察された。

（研究助手　奥香織・菊地浩平）

新刊紹介

「還ってきた文楽フィルム『日本の人形劇―人形浄瑠璃』研究報告」

（内山美樹子監修　武田潔編　早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム　2011年3月発行）

2008年初頭より日本演劇研究コースと映像研究コースが共同で進めた「文楽フィルム・プロジェクト」の報告書が日仏2ヵ国語版として刊行された。フランスのアルベール・カーン博物館に所蔵されていた現存最古の文楽の記録映画をめぐって、同博物館の協力によりその複写プリントを入手し、映像のデジタル化と内容の分析を行った研究成果は、2009年末に催された研究報告・上映会で発表され、大きな反響を呼んだ（本誌No.7掲載の桜井弘氏による報告記事を参照）。その成果を踏まえ、本プロジェクトの代表であった内山美樹子名誉教授の監修と、カーン博物館との交渉を担当した武田の編纂のもとで刊行されたこの報告書は、小松弘教授による日本映画史の観点からの解説、カーン博物館のJ・ルクレール女史によるフィルム収蔵の経緯に関する考察、桜井氏によるフィルムの概要説明と全ショットの詳細な分析表などを、日本語とフランス語で所載している（桜井氏の2つの記事については、研究協力者であるパトリック・ドゥヴォス東大教授が翻訳を担当した）。演劇と映像、日本とフランスを結びつけるユニークな研究成果として――さらにはフランスの銀行家アルベール・カーンと早稲田大学の創立者大隈重信との深い友情に捧げられたオマージュとしても――ご一読いただければ幸いである。

（事業推進担当者　武田潔）

日本演劇研究コース：

活動報告

■「アルベール・カーン博物館資料調査」報告

当拠点の研究成果により、フランスのアルベール・カーン博物館が、文楽の現存最古のフィルムを所蔵していることが、明らかになった。そのカーン博物館が、能楽のフィルムも所蔵しているらしいという情報が、中尾薫氏（大阪大学専任講師・演劇博物館招聘研究員）より、児玉竜一（事業推進担当者）に齎された。中尾氏は、展覧会「渋沢栄一とアルベール・カーン：日仏実業家交流の軌跡」により、カーン博物館が古い能楽のフィルムを所蔵していることを知ったということである。早速、フィルムの詳細確認のため、2011年2月に児玉教授と原田真澄（研究助手）が、現地調査に赴いた。結論から書けば、その演能フィルムは、幕末から明治・大正時代にかけて京都を中心に活躍した金剛流の重鎮金剛謹之輔（1854-1923）の映像である可能性が、非常に高いということが判明したのである。現在「現存最古」の能楽の映像として販売されているDVD「名家の面影」は、1932年以降に撮られた映像である。アルベール・カーン博物館のフィルムにより、「現存最古」の上限が大幅に遡る可能性が高い。

現在、撮影時期や金剛謹之輔以外の出演者などについて更なる調査を行っている。さらに今回の調査で、アルベール・カーン博物館が、京舞や民俗芸能の古いフィルムを所蔵していることも明らかになった。また、同博物館はフィルムだけではなく、演劇・芸能に関連する極初期のカラー写真（オートクローム）も多数所蔵している。近年、欧米各国ではアルベール・カーン博物館の研究が進んでいるようである。アルベール・カーン博物館の貴重な映像・画像資料を、今後の演劇研究に役立てていくためにも、日本でも網羅的な研究・調査を行う必要があろう。今後の研究の進展が待たれる。

■「芸能の音声・映像資料についての研究会」日本演劇研究コース（近世演劇）

第九回芸能の音声・映像資料についての研究会

日時：2011年1月20日（木）19:00 ～ 21:00
講師：児玉竜一（事業推進担当者）・飯島満（GCOE研究協力者）
題目：劇評家の肉声および能狂言に関する映像資料について

第十回芸能の音声・映像資料についての研究会

日時：2011年4月21日（木）19:00 ～ 21:00
講師：児玉竜一、発表者：日置貴之（GCOE研究生）
題目1：「震災と芸能」
題目2：アルベール・カーン博物館出張成果報告

第十一回芸能の音声・映像資料についての研究会

日時：2011年6月2日（木）19:00 ～ 21:00
講師：児玉竜一
題目：「誠忠義士銘々伝」について
場所：戸山キャンパス33-2号館 演劇映像第2専修室　（215）
（全回共通）

日本演劇研究コース（近世演劇）主催の「芸能の音声・映像資料についての研究会」は、今年も活発に活動を続けている。特に、3月11日の震災以降の第十回研究会では、「震災と芸能」と題した研究会を行った。日置貴之（GCOE研究生）は、明治三陸地震（1896年）による大津波の様子を描いた演劇「大海嘯」や、被災地の様子を伝える幻燈について、児玉竜一教授は、曽我廼家五郎による関東大震災（1923年）のルポルタージュレコードについて報告した。この二つの報告により、近代には芸能がメディアの役割を担って、災害の様子を全国に届けた事例が多く確認された。芸能と災害、そして芸能とメディアとの関係について議論がなされ、参加したGCOE研究生らにとって非常に有意義な研究会となった。

（研究助手　原田真澄）

『シェイクスピアの広がる世界：時代・媒体を超えて「見る」テクスト』

（冬木ひろみ・本山哲人編著　彩流社　2011年3月発行）

本書のタイトルが示しているように、シェイクスピア研究の可能性は無限である、そんな印象を抱かせる1冊である。本書は、本プログラム「シェイクスピア・ゼミ」におけるこれまでの研究活動の集大成であるといえる。各論文が扱うテーマは多岐にわたっている。しかし、それぞれに共通しているのは、様々なコンテクストの中で世に出されたテクストが持つ、それぞれ個別の意味を探ろうとしている点であるように思われる。同じ作品であろうと、テクストが持つ意味は、世に出された時代、場所、そしてその他さまざまな文化的コンテクストにより異なるという考え方は、今日では受け入れられつつあるものである。しかし、それぞれのテクストが持つ意味がどのように異なっているのか、それぞれのテクストがどのような意味を持っているのか、という問いに、研究者たちはなかなか具体的に答えることができていなかった。本書は、このような問いに正面から向き合い、その答えを導きだそうとしているものだと言えるだろう。

（GCOE研究協力者　鈴木辰一）

『フランス17世紀演劇事典』
（オディール・デュスッド、伊藤洋監修、中央公論新社　2011年３月発行）

フランスの17世紀は他のヨーロッパの国々同様、演劇の黄金時代であったが、この世紀は演劇がことのほか栄えたというばかりではなく、近代的な演劇に変貌した大切な時代である。ヨーロッパ各地に屋内の劇場ができ、職業人としての演劇人（俳優・劇作家）が誕生した。また印刷術の普及により戯曲が広く読まれるようになったのだ。そのような貴重な世紀の総体を紹介するために、本書では総論、1部 作家、Ⅱ部 作品、Ⅲ部 事項の4つのパートを設けた。17世紀の演劇の流れを解明し、ほぼ60人の作家と250の作品の梗概および解説を載せ、それらを理解するのに必要な事項を150ほどあげて説明した。作品としてはコルネイユ、モリエール、ラシーヌのものばかりではなく、17世紀前半の主要な作家ロトルー、メレ、トリスタンなどをほぼ全作品にわたってとりあげた。また事項については、ドラマツルギーに関するもの、諸論争、17世紀演劇周辺の重要人物などをとりあげた。さらに、本書のあちこちに36のコラムを配し、読み物風の記事を通してフランス17世紀演劇を多様な視点から眺められるようにしてある。17世紀演劇の現代における受容を始め、宮廷バレエ、オペラなどの音楽関係、役者や女優などのほか、演劇に批判的だったパスカルの目から演劇をみるコラムなどもあり、多彩である。

（GCOE研究協力者　野池恵子）

EVENT CALENDAR

2011年度第二回グローバルCOE博士論文成果報告会

日時：2011年7月22日（金）14：20～16：45　会場：早稲田キャンパス26号館302会議室
　　7月23日（土）10：00～17：10

プログラム（入場無料・予約不要　使用言語：日本語）

【7月22日（金）】

① 14：20～15：30　松田智穂子（西洋演劇研究コース）　学位：一橋大学（学術）、2011年３月授与
「Derek Walcott's Theatrical Works and His Challenges as a Postcolonial Caribbean Man of Theatre（デレク・ウォルコット－ポストコロニアル・カリブの演劇人としての挑戦とその演劇作品）」

② 15：35～16：45　梅山いつき（西洋演劇研究コース）　学位：早稲田大学（文学）、2011年６月提出
「アングラ演劇における身体の表象と言語活動」

【7月23日（土）】

① 10：05～11：15　木村智哉（映像研究コース）　学位：千葉大学（文学）、2011年２月提出
「革新と拡散―日本におけるアニメーションの変容に関する文化思想史的考察」

② 11：20～12：30　成田雄太（映像研究コース）　学位：東北大学（情報科学）、2011年３月授与
「無声映画期における活動弁士言説の研究―日本映画史再考」

③ 13：30～14：40　榎本恵子（西洋演劇研究コース）　学位：ソルボンヌ大学（Ph.D）、2011年１月授与
「Plaute et Térence en France aux XVIe et XVIIe siècles（16、17世紀フランスにおけるプラウトゥスとテレンティウスの受容）」

④ 14：45～15：55　落合恵理子（西洋演劇研究コース）　学位：京都大学（人間・環境学）、2010年９月授与
「〈フェッラーラ牧人劇〉研究　ジラルディ＝チンツィオの『エグレ』からグァリーニの『忠実な牧人』まで」

⑤ 16：00～17：10　平野恵美子（舞踊研究コース研究協力者）　学位：東京大学（文学）、2010年９月授与
「バレエ《火の鳥》の起源：20世紀初頭ロシア文化と帝室劇場」

編 集 後 記

ニューズレター第11号をお届けいたします。2011年度は大震災の衝撃の内に幕を開け、その余波は未だ収まりません。当拠点の最終年度にあたって、引き続き当拠点の多彩な、そして今だからこそ出来る活動をお伝えして行きたいと思います。末文ながら、震災で被災された方々にお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い被災地の復興をお祈り申上げます。

（研究助手　原田真澄）

News Letter 第11号
2011年7月15日
編　集：原田真澄　奥香織　菊地浩平　大傍正規　光岡寿郎　山本律　李宛儒　渡沼玲史
発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」
　　拠点リーダー　竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム
〒169-8050　東京都新宿区西早稲田1-6-1
TEL：03-5286-8110
URL：http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html